

本尊薬師如来と現世利益

周防国分寺の本堂にある仏像 50 体の中で、主たる信仰対象となる仏像は、薬師如来です。須弥壇の中央に安置されており、大きさで他の仏像と比較するとその重要度が反映されています。薬師如来は、病気から人を救い、飢えと渴きをなくし、生活の必要性を満たしてくれます。すべてにおいて現世利益をもたらします。

薬師如来は、いくつかの木材をつぎ合わせ作る造像技術（寄木造として知られている技法）を用いて造られており、光背には頂に大日如来、その下に飛天と迦陵頻伽が彫られています。また薬師如来の台座は仏様の浄土を表す蓮の花になっています。質素な僧侶の袈裟を身にまとうことで、悟りを開かれた如来であることを示しています。1997 年から 2004 年の間で行われた本堂の解体修理期間中、薬師如来像は移設されました。この仏像が左手に持っている薬壺が開封されることになり、日本の薬師如来では珍しいものが発見されました。壺の内側は金色で、中には本当に漢方薬や五穀、ガラスなどの鉱物が入っていたのです。

同時に今の薬師如来像の基礎部分内側から、10 世紀の薬師如来像の左手が発見されました。1417 年、落雷により寺院が焼失したとき、仏像が大き過ぎたために運び出すことができなかったのですが、当時の住職が左手を抜き取ったために焼失を免れたのです。この左手は長さが 64cm あり、今の薬師如来坐像の手よりも 2 倍の大きさがあります。当初の仏像はもっと大きかったことを示唆しています。